



鹿児島日英協会 ニュースレター 第3号

The Japan British Society of Kagoshima Newsletter No.3 October 2015

会長ごあいさつ ~ニュースレター第3号発行に寄せて~

『鹿児島日英協会ニュースレター』もお蔭さまで第3号発行の運びとなりました。

今年は薩摩藩英国留学生派遣 150 周年の記念すべき年です。鹿児島県と鹿児島市が中心となって実施された記念事業では当協会青年部の川畠郁美副会長が19名のメンバーの一員として渡英、素晴らしい交流を展開して参りました。英国では鹿児島出身の在住者が中心になって様々な記念事業を展開しております。

鹿児島でも10月下旬に、今年で3回目となる『薩英文化祭』(鹿児島市主催、鹿児島日英協会協力)を開催し、英国訪問体験発表、英国と関わりのある店舗、記念館、物産等のリーフレット配布による紹介やアイリッシュ・ケルト音楽の演奏等多彩な関連イベントを実施し、英国との交流、理解を更に促進することになっております。どうぞ気軽にお出かけください。

今後とも当協会の活動にご理解とご協力を願い申し上げます。

鹿児島日英協会会長 酒瀬川純行(志學館大学人間関係学部長・教授)

【英国留学生派遣 150 周年記念薩摩藩スチューデント派遣団の様子】



鹿児島ゆかりの方々との交流会



ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンにて



UCL 主催「薩摩藩留学生渡英 150 周年記念
レセプション」の様子

目次

① 鹿児島日英協会発足のころ	p.2
② 明治日本の産業革命遺産	p.3
③ ティム・ヒッキンズ駐日英國大使講演会とお茶会	p.4
④ 薩摩スチューデント英国派遣事業体験報告	p.5-6
⑤ ロンドン語学留学	p.7
⑥ イギリスひとつくちメモ	p.8
⑦ 事務局より	p.8

① 鹿児島日英協会発足のころ



近代日本の歴史はヨーロッパとの関わりで始まったと言っても過言ではないでしょう。1865年薩摩藩英國留学生を密航させた留学生と使節一行は、その後、明治政府や経済界で大きな近代日本の礎（いしづえ）になったことは鹿児島人の誇りでもあります。その後、日露戦争で英国との同盟関係が財政的に日本を救うことになったことは特記すべきことだと思います。当時まだ発展途上国であった日本は世界の信用はなく、経済的な苦境に陥っていました。

その時、日本の国債を大量に引き受けたのが英國だったと記されています。天皇を頂点にいただく日本国と王室をいただく大英帝国とは理解し合える関係にあったのかもしれません。

太平洋戦争後、日本は米国と同盟関係を結び発展を続けましたが、心の底には英國との歴史的関係は忘れずにいたに違いありません。そして、日本の各地で「日英協会」ができるなかで、歴史的に最も関係の深い鹿児島に「鹿児島日英協会」ができたのは必然だったと思います。発足当時は鹿児島県内の財界や大学が中心になって基礎を築きました。中でも英国人医師のウイリアム・ウィルスは鹿児島大学医学部の発足の精神的バックボーンだったと思います。鹿児島日英協会の第一代会長に佐藤八郎先生（医学部教授）が就かれたのは当然のことだったと思います。佐藤先生は温厚で物静かな人柄で皆さんをリードされました。しかし突然の死去で、第二代会長に尾辻義人先生が就任。第三代会長、瀬戸山史郎先生も突然に亡くなられ、第四代会長に志学館大学教授の酒瀬川純行先生が引き継がれました。

私はかつて仕事で鹿児島県が薩摩藩英國留学生派遣125周年を記念して19名の鹿児島の若者たちを英國に派遣した企画に参加しました。団長は原口泉先生（当時鹿児島大学教授）で、歴史の解説を受けながら留学生たちが辿った足跡を歩きました。ロンドンでは新聞社で留学生たちの新聞記事を見ることができました。日本という国がまだ英國人には知られていない当時、とても珍しく映ったと思います。さらにスコットランドでは長澤鼎（かなえ）のホームステイ先の旧グラバー邸や学籍簿の残るギムナジウム（中学校）なども訪れ、長澤がいかに優れた人物であったかを学ぶ機会になりました。あれから25年がたった今年は薩摩藩英國留学生派遣150周年となり、鹿児島県は再び19名の視察団を英國に派遣しました。

薩摩と英國の関係は今でも脈々と鹿児島の地に息づいていることを感じています。今後とも官民一体となって英國との友好関係を継続させるための協会の使命は大きいと思います。

鹿児島日英協会 理事 古木圭介（株式会社 グローバルユースビューロー 取締役）

② 明治日本の産業革命遺産

2015年7月、鹿児島の旧集成館などを含む「明治日本の産業革命遺産」が世界文化遺産に登録されました。

実は、この「明治日本の産業革命遺産」の世界遺産登録、日本人だけでなく、多くの外国人研究者も世界遺産にしたいと熱心に動いてくれていたのです。イギリス人のスチュワート・スミス氏もその一人でした。

スミス氏は、アイアンブリッジ渓谷の世界遺産登録に携わった方で、19世紀、アジア・アフリカ諸国の中で、なぜ日本だけが近代化・工業化に成功したのか興味を持たれ、2002年、日本の近代化・工業化が始まった鹿児島を訪ねてこられました。

集成館事業の研究をしていた私が、スミス氏の案内役を仰せ付けられました。そして、鉄を溶かす反射炉がオランダの書物を参考に建造されたと説明していた時、説明を遮って「ウソだ」「技術は文章化できない。いくら本を読んでも鉄は溶けない」と言われました。

スミス氏がいうのももっともです。ですが、反射炉を造り始めたのはペリー来航の前の1852年、日本は鎖国体制下にあり、外国から必要な資材を輸入することも、専門家を招いて教えてもらうこともできませんでした。オランダの書物から得た知識を、日本の技術に置き換え、融合させていくという特殊な方法をとらざるを得ませんでした。例えば、反射炉の耐火煉瓦は薩摩焼の陶工たちが焼いています。様々な機械はカラクリ職人たちがひもといて造り上げました。このように具体的な事例をあげて、このような特殊な、苦労する方法をとらざるを得なかつたことが、逆にアジア・アフリカで唯一の成功に繋がったとスミス氏に説明すると、スミス氏も納得され、日本はすごい、おもしろいと、研究者仲間を次々に鹿児島に連れてきてくださいました。イコモス名譽会員のヘンリー・クリアさん、イギリッシュヘリテイジ総裁のコソン卿などです。

そして、近代化遺産を世界遺産にするため世界遺産登録推進協議会が設置されました。会長は伊藤鹿児島県知事、事務局は鹿児島県の世界文化遺産課、専門家委員会の統括委員長はコソン卿、副委員長はスミス氏が就任されました。スミス氏らの努力が実を結び、2015年の世界文化遺産登録となった次第です。

残念ながら、スミス氏は2014年、吉報を聞くことなく天国へ旅立たれてしまいました。しかし、きっと天国で喜んでくださっていると思います。



外国人専門家の視察 2009年、右から4人目がスミス氏

鹿児島日英協会 理事 松尾千歳（薩摩尚古集成館 副館長）

③ ティム・ヒッキンズ駐日英國大使講演会とお茶会



2015年2月15日、ティム・ヒッキンズ駐日英國大使が鹿児島を訪れました。大使は鹿児島県民交流センターで行われた「明治維新150周年に向けた講演会」に登壇し、「日英関係：19世紀と21世紀」という演題で明治維新期の薩摩藩留学生の活躍について話されました。

同講演会では、鹿児島県立図書館長を勤める原口泉氏も「明治維新と国際交流」と題して日本の近代化について触れ、日英双方の視点から鹿児島における明治維新期の国際関係が取り上げられました。

来場者にとっては、明治維新期の文化交流や技術革新について理解が深まる大変興味深い講演会だったかと思います。

講演ののち、仙巖園では大使をお迎えして茶話会（ティーパーティー）が行われました。この茶話会には我々鹿児島日英協会のメンバーも参加し、大使と直接お話しする機会を頂くことができました。

大使は日本語が大変流暢で、講演では会場がどよめくほど。剣道も初段の腕前（現在は2段）。茶話会は日本語で行われ、鹿児島の活火山を中心とした風土や景観について語られました。当日は曇り気味で、あまり綺麗に桜島をお見せできなかったのが残念でしたが、我々鹿児島日英協会メンバーにとっては、国際交流に対する刺激を受ける素晴らしい機会となりました。



鹿児島日英協会 青年部会員 広報部長 久保田克彦

④ 薩摩スチューデント英国派遣事業体験報告

～ 英国と鹿児島の今後のさらなる友好と親善を願って ～

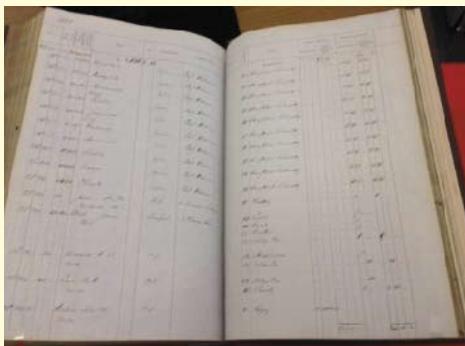
今から 150 年前の 1865 年 4 月、現在のいちき串木野市羽島浦から 19 人の若き薩摩藩士が西欧の産業技術を学び、持ち帰るべく英國へと密かに旅立ちました。19 人の藩士たちの中には、後の外交の分野で外務卿として不平等条約の改正に尽力した寺島宗則、教育の分野では、初代文部大臣に就任し教育制度の基礎を作った森有礼、東京開成学校(後の東京大学)初代校長に就任した畠山義成、経済の分野では大阪商工会議所を設立し初代会頭に就任した五代友厚、サッポロビールの創設に尽力した村橋久成、アメリカへ渡りぶどう園とワインの製造等の経営で名を馳せた長沢鼎など、幕末から明治の日本の近代化に貢献し一度は名を耳にしたことのある人物ばかりです。

その英國へと旅立った記念すべき 150 年後の 2015 年鹿児島県では彼らと同じ 19 人、同じ年代の鹿児島の若者を英國へと派遣する国際交流事業が計画されました。2015 年 7 月 19 日～29 日の 11 日間、薩摩スチューデント英国派遣 150 周年記念事業に 19 人の団員の一人として私も参加させていただきました。

イギリスやロンドンと聞いて思いつくものにビッグベンやバッキンガム宮殿をはじめとした歴史ある名所、二階建ての赤いバス・ダブルデッカー、朝ドラの「マッサン」でも取り上げられたスコッチウイスキー、ハリー・ポッターシリーズなどの映画などあげられるのではないかでしょうか。しかし、あまり英國に馴染みのない方からは「イギリスの食事って美味しいんでしょう?」とよく言われることがあります。その言葉を聞くと、英國は伝統も歴史もある魅力的な国なのにその一言で表現される程のイメージが強いのかと残念な、少しさみしい気持ちになります。地理的には遠い異国ですが、生麦事件や薩英戦争、薩摩スチューデント英国派遣など英國と鹿児島は歴史的に深いつながりがあります。しかし私自身も、今回の薩摩スチューデント 150 周年記念英國派遣前までは英國と鹿児島との歴史にあまり詳しくなく、一般の方を含め英國との歴史的なつながりが知られていないと気付かされました。私は学生時代に英國の歴史や文化などを学び、ロンドン語学研修に参加するなど以前から英國に対し興味関心を抱いておりました。また周りに渡英経験者が多くおり、英國で見聞きした話など聞く機会もあり、もし私が英國へ行くなら、〇〇へ行きたい、〇〇を見てみたい!と体験、挑戦してみたいことが多く、よく言われる英國の食事情については特に考えもしたことがありませんでした。

薩摩スチューデント達の足跡を辿る機会をいただき、貴重な経験となったことはいうまでもありません。薩摩スチューデント達の在籍したユニバーシティ・カレッジ・ロンドン(UCL)訪問、現地の高校生大学生、薩摩 150 や Japan Society の方々との交流、長沢鼎が学んだスコットランド、アバディーン市訪問ならばにホームステイなど充実した 11 日間でした。

幕末から明治初期の日英関係やその後の両国間の交流について学び、実際に自分の目で見て体験することが出来ました。英國派遣中にはたくさんの方々から薩摩スチューデントに関する話を伺う機会があり、鹿児島の偉大な先人達を誇りに思いました。



(左)
トーマス・グラバーの家にて
(右)
150 年前の留学生の名前が
載っている学籍簿

今回の薩摩スチューデント派遣での一番印象に残っていることは、スコットランドのアバディーン市訪問や、そこでのホームステイです。アバディーン市役所で催された歓迎セレモニーではバグパイプの演奏やスコティッシュダンスなどを拝見しスコットランドの文化を感じることが出来ました。アバディーン市長のキルト姿、市内をバス移動している際に見かけた教会での結婚式では男性の方がキルトを着て正装していましたし、伝統的な民族衣装キルトが身近なものであり、誇りに思っているのだと感じたと同時に、私は本当にスコットランドに来ているのだ！と感動しました。ホストファミリーのワットさんからは「スコットランドは1日に四季があるんだよ」と教えていただきました。鹿児島と異なるスコットランドの朝晩の寒冷の差、日中の曇り空のときの冬のような寒さ、日が差したときの夏のような暑さ、コロコロと変わる天候。。。まさに1日の中に四季がある、自分の身を持って体験することが出来ました。私がイメージしていたスコットランドとは異なり、ぜひまた訪れてみたいとも思いました。

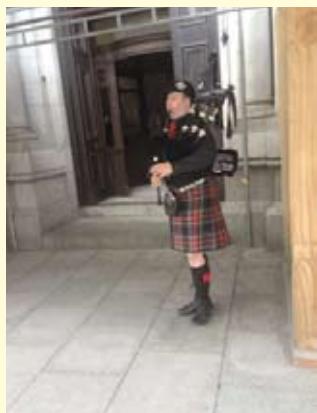
英国派遣を通じて自分自身の目で見て、触れ、体験し、学び取ろうとする姿勢をもつこと、また失敗を恐れず挑戦する心の大切さを学びました。派遣前には私に何ができるのだろうか、年長者として他団員をまとめることができるだろうかと考えたりもしましたが、実際に英国に行くと他団員の積極性、探究心、何事にも挑戦しようという姿を見て、大変刺激を受けました。海外の方からは日本人はシャイと言われますが、芯の強さは負けないのでしょうか。

物にはイメージがあり、またそこから役割を期待されます。異文化交流のイメージは知らないことを学ぶ機会、体験する機会、明るい楽しそうなものを想像する方が多いと思います。しかし実際は必ずしもイメージ通り、期待通りにいくとは限らず、日本で当たり前のことが外国で通じないとき、日本ではこうあるべき、こう対応されるはずなのに！というような場面に直面すると、カルチャーショックを受けるかと思います。そして無意識に理想と期待を抱いていた事に気付かされ、理想と現実の差、ギャップが生まれます。そのギャップを小さくするために何が必要か考えた時に、相手を、相手の文化を尊敬し理解しようとする心構えが重要であり、見聞を広め、柔軟な視野を持つことが必要不可欠でもあり、そのような意識を持つことが鹿児島だけでなく日本の国際化につながるのだと再認識いたしました。

相手を理解するために何が必要であるか、鹿児島に住むひとりの社会人として、市民として鹿児島で出来ることは何かと考えました。鹿児島日英協会に在籍していることもあり、青年部の仲間たちと何か活動したいとも考え、現在は、鹿児島にある身近な英國をテーマに観光マップの作成、明治維新カウンタダウン事業のひとつ薩英文化祭で配布出来るよう邁進中です。

今後、薩摩スチューデント派遣事業での経験を生かし、青少年交流や英国紹介のあり方など広く交流・広報活動に関わっていけるべく努力していく所存です。理想と現実のギャップ、異文化交流のギャップを小さく出来るよう、また英国に対するイメージの改善につながるよう、今回の英国での貴重な体験の共有や、異文化理解・交流体験などの企画、魅力ある鹿児島と英国との交流促進の一翼を担いたいとの気持ちを強くしています。

鹿児島日英協会 青年部 副会長 川畠郁美



(左)
アバディーン市
役所でのバグパ
イプの演奏
(中央)
アバディーン市
長表敬訪問
(右)
ホストファミリ
ーワットさんご
夫婦と空港にて

⑤ ロンドン語学留学

～ イギリスでの語学研修に参加して ～

今春、私はイギリスにて語学研修を行う機会を得た。そこでの体験はどれも今まで経験したことのないようなものであり、私の価値観や視野を広げてくれるものとなった。

特に、日本大使館での経験は非常に貴重な経験となった。引率の酒瀬川教授の友人で在英日本大使館の館員である S 氏の招待によって大使館内で行われる薩摩琵琶のコンサートに行く機会を得ることができた。恥ずかしながら、私は鹿児島に 10 年以上住んでいるにも関わらず、薩摩琵琶の音色というものは一度も聴いたことが無かった。初めて聴く琵琶の音色は、かつての武士の姿や鹿児島の情景などを思い浮かばせてくれた。また、薩摩琵琶を現代の音楽とも融合させた演奏をするなど、伝統的な音を保ちながらも革新的な曲を作ることもできるのだと感じた。

その後はレセプションで、皆ワインや鹿児島の焼酎を飲みながら思い思いの時間を過ごしていた。その際一組の老夫婦に出会ったのだが、彼らは義理の娘の出身地である鹿児島を訪れたこともあり、鹿児島の自然の雄大さや人々の親切さに心を打たれたという。私もイギリスに滞在中、人々の親切さや建造物の美しさ、そして素晴らしい文化を持つイギリスを心の底から素晴らしいと感じたことを伝え、お互いに自国の素晴らしさを実感することができたのではないかと思う。

今回のイギリスでの経験を通して、私はイギリスと鹿児島は歴史的に見ても日本の他の県と比べてより深い関係があり、多くの交流を交わしてきたのだと実感した。イギリスで売られている小ぶりなオレンジには「サツマ」という名前が付いていたり、鹿児島の黒豚はイギリスのバークシャー種が原種であったりと、なにかしらの関連がある。ロンドン大学には、かつてイギリスを訪れた薩摩スチューデントや長州藩からの留学生の名を記した石碑もあった。

かつて鹿児島はイギリスと戦争を起こし、戦った。しかしその後は西洋文明の発達ぶりを見習い、薩摩スチューデントを派遣して西洋の技術を学ばせた。イギリス側も薩摩の軍事力や留学生たちの勤勉さに感心したという。

伝統を保ちながら時代の流れに上手く適応し成長し続けていくイギリス、そして他国との技術力の高さを素直に認め、自國に取り入れようとした鹿児島や見知らぬ地で様々なことを学んだ薩摩スチューデントのように、私もこの経験をもとに勉強を続け、新たな世界を切り開いていきたいと思う。

志學館大学 人間文化学科英語英米文化コース 3年 鳥丸 拓人



⑥ イギリスひとくちメモ

イギリスといえば「ガーデニング」の国。ロンドンで毎年開催される『チャーチル・フラワー・ショー』と月刊誌 *The Garden* で知られる RHS (Royal Horticultural Society 王立園芸協会) の設立は 1804 年にまで遡る。会員数は 40 万人を超え、Wisley Garden 等 4 つの大規模庭園を持つ。

私庭を公開し、入場料を福祉慈善活動に寄付するチャリティ団体 NGS (National Garden Scheme) も 1927 年に始まった。オープンする大小の庭園は毎年発行される *The Yellow Book* に掲載される。今ではその数 3800 を超える。入場料の平均は 4 ポンド。多くの庭園でティーやケーキが出され、苗木の販売もある。いつも見られない私庭の公開はガーデン愛好家にとっては垂涎のイベントである。

(文責：酒瀬川)



⑦ 事務局より

～ 訃報 ～

本協会が大変お世話になりました、お二人が永眠されました。深い感謝とともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

尾辻義人 様（本協会元会長）

1994年2月から2010年10月までの約16年間、会長を務められ、退任後も長年に渡り本協会をご支援いただきました。2015年3月19日に90歳で永眠されました。

渡辺正清 様（ノンフィクション作家）

昨年11月、本協会の講演会で「薩摩藩留学生が英國で考えたこと」と題して興味深い話をいただきました。2015年4月17日に77歳で、在住の米カルフォルニア州で永眠されました。

～ 今後の予定 ～

*第24回 理事会・総会・講演会・演奏会・懇親会

開催日：2015年10月23日（金）

於：鹿児島県医師会館

*薩英文化祭～若者よ、西洋を学べ～

開催日：2015年10月24日（土）・25日（日）

於：鹿児島市加治屋町 南洲橋から高麗橋間の

右岸側（甲突河畔オープンテラス一帯）

※詳細は、別紙にてご確認お願い致します。

【鹿児島日英協会 事務局所在地】

〒890-8504 鹿児島市紫原1丁目 59-1 (志學館大学内)

TEL: 099-812-8501 Fax: 099-257-0308

URL: <http://www.shigakukan.ac.jp>

Contact Email: sakasegawa@shigakukan.ac.jp